名城大学
経済・経営学会会報
No.98
『名城論叢』
第二十五巻　第二号　付録
二〇二四年十二月五日
名城大学　経済・経営学会　発行

ジョン・ロックの「感覚の哲学」と「反省の哲学」……門　亜樹子　1

ジョン・ロックの「感覚の哲学」と「反省の哲学」

経済学部　門　亜樹子

一、はじめに――アダム・スミスと哲学

「古典派経済学の父」と称されるアダム・スミスは一七二三年にスコットランドのカコーディに生まれた。二〇二三年はアダム・スミス生誕三百周年にあたり、国内外で記念シンポジウムや特集が組まれ、スミス研究において記念すべき年であった。スミスは一七七六年に出版した『諸国民の富の本性と諸原因についての研究』（『国富論』）第四編において重商主義と重農主義を批判し、特定の産業部門に対する優遇政策や規制政策――「優先の体系」や「抑制の体系」――が「適度かつ徐々に」撤廃されれば「自然的自由の体系」が確立され、個人の自由競争が可能になると主張し[1]、市場経済に基づく新たな学問としての政治経済学（political economy）を提唱した。この功績によって、スミスは「古典派経済学の父」と称されたのである。

スミスの「自然的自由の体系」の基礎にあるのは、人間の自愛心（selflove）の追求が「見えない手」によって公共の利益の達成につながるという考え方である。自愛心はキリスト教の「七つの大罪」の一つ「傲慢（プライド）」の源泉とされ、キリスト教道徳において忌避すべきものとされた。オランダ出身のイングランドの医師バーナード・デ・マンデヴィル（Bernard de Mandeville, 一六七〇―一七三三）もまた、『蜂の寓話』（初版一七一四年）で、キリスト教聖職者の非難の対象となった悪徳（自愛心、奢侈、プライド）が経済を発展させる必要悪であり、原動力でもあると主張し、その増補第二版（一七二三年）ではミドルセックス州大陪審から告発されている。このようにキリスト教における悪徳を経済発展の観点から肯定的に捉えているのが、ヨーロッパ啓蒙思想の特徴である。古典派経済学形成過程を解明するには、スミスの脱キリスト教化（世俗化）の思想的背景として、古代ギリシャ・ローマの古典への彼の関心について検討する必要があると考えられる。

スミスが生前に出版した著作は『国富論』以外に『道徳感情論』（一七五九年）がある。スミスは一七五一年にグラズゴウ大学論理学教授に着任し、翌年同大学道徳哲学教授トマス・クレイギの死去に伴い、後任として道徳哲学教授に移籍した。スミスは一七六二年にグラズゴウ大学から法学博士号を授与され、一七六四年に教授の職を辞した（一七八七年にグラズゴウ大学総長に就任している）。したがって、『道徳感情論』はグラズゴウ大学教授時代に出版された著作である。スミスは最晩年（一七九〇年）まで『道徳感情論』と『国富論』の改訂作業を続けるとともに、別の二つの大作を準備していた。それらは「文学すべての異なる部門、すなわち哲学、詩、雄弁に関する一種の哲学的歴史」と「法と統治の一種の理論と歴史」に関する著作であったが、[2]（当該二著作に関連する、学生による講義ノートは残されているが）未完に終わった。スミスは遺言執行人に準備中の原稿の大半を焼却するよう命じ、焼却を免れた一部の原稿が、彼の死後に遺稿集『哲学論文集』（一七九五年）として出版された。『哲学論文集』に収録されている「外部感覚論」の執筆時期については、非常に初期のものだとする見解と、スミスが大陸旅行から帰国後の一七六七年以降のものだとする見解に意見が分かれている。[3] スミスはグラズゴウ大学着任以前の一七四八年から一七五一年の間、毎年冬から春にかけて三回の冬期講義としてエディンバラで「修辞学・文学」、「哲学史」および「法学」の公開講義を実施し、[4] 生涯を通じて哲学に強い関心を抱いていた。

本稿では、スミスの哲学への関心に迫る手がかりとして、同時代の知識人ピエール・プレヴォとドゥーガルド・ステュアートの近代哲学史を取りあげる。プレヴォはスミスの遺稿集『哲学論文集』の仏訳者である。ドゥーガルド・ステュアートはスミスと面識があり、スミスの伝記「アダム・スミスの生涯と著作」を執筆した。このスミスの伝記は、エディンバラ王立協会の『会報』第三巻（一七九四年）に掲載され、翌年に出版された『（スミス）哲学論文集』の冒頭に多少の変更を加えて再録された。[5]

プレヴォとステュアートの両者ともスミスと縁の深い人物である。本稿では、まず両者の近代哲学史におけるカント解釈の相違に着目する。この相違は、近代イギリス経験論の祖ジョン・ロックの主著『人間知性論』（一六九〇年）の観念の源泉としての「感覚」と「反省」のいずれを重視するかに起因する。次に、『人間知性論』の観念の源泉に関する内容を紹介し、ステュアートのロック解釈の妥当性について検討する。

二、ピエール・プレヴォとドゥーガルド・ステュアートのカント解釈[6]

ピエール・プレヴォ（Pierre Prévost, 一七五一―一八三九）はジュネーヴに生まれ、プロイセンの科学アカデミー会員ならびに貴族学院教授、ジュネーヴ・アカデミーの文学教授、理論哲学、理論物理学教授を歴任した。[7] 政治にも携わり、ジュネーヴ共和国の拡大市参事会のメンバー、国民議会の議員に就任している。プレヴォはスコットランド知識人の著作を多数仏訳した。スミ

スの『哲学論文集』もその中に含まれる。ドゥーガルド・ステュアート（Dugald Stewart, 一七五三―一八二八）はエディンバラ大学道徳哲学教授をつとめ、主著『人間精神の哲学要綱』（三巻本：一七九二、一八一四、一八二七年）をはじめ、『哲学試論』（一八一〇年）、『人間の能動的および道徳的力能の哲学』（一八二八年）などの著作がある。認識論の観点では、トマス・リード（Thomas Reid, 一七一〇―一七九六）のコモン・センス哲学（常識哲学）を擁護した。当時のヨーロッパ大陸の知識人は英語を習得している者が少なく、こうしたブリテンの軽視を是正することを目的として、一七九六年にジュネーヴで『ビブリオテク・ブリタニク』誌が創刊された。プレヴォは同誌の初期の助手および協力者の一人であった。プレヴォはたびたびブリテンを旅行しており、ステュアートとの最初の出会いは一七九二年と推定されている。両者の交流はステュアートが死去するまで続いた。

プレヴォが『哲学論文集』仏訳版（一七九七年）に記した訳者解説は、近代哲学の三つの学派――スコットランド学派、フランス学派、ドイツ学派――の概説である。このことから本稿ではプレヴォの訳者解説での当該概説内容を「近代哲学三学派」と呼ぶ。ステュアートの『ヨーロッパ文芸復興以来の形而上学・倫理学および政治学の発展に関する一般的展望』（『近代西欧哲学史』）について、第一部「文芸復興期から一七世紀末までの形而上学の発展」と第二部「一八世紀における形而上学の発展」は、『エンサイクロピーディア・ブリタニカ』第四・五・六版の補巻の第一巻（一八一五年）と第五巻（一八二一年）の冒頭に掲載された。これらは後にウィリアム・ハミルトン編『ドゥーガルド・ステュアート著作集』第一巻（一八五四年）に（断片的な）第三部「一八世紀の倫理学と政治学の発展」とともに収録されている。

本稿で検討するのは、プレヴォの「近代哲学三学派」とステュアートの『近代西欧哲学史』のうち、カント哲学の評価に関する部分である。カント哲学の新奇性を強調する同時代の知識人の見解に対し、プレヴォとステュアートはともに否定的である。一方、両者のカント評における相違は、カント哲学に近代イギリス経験論の祖ジョン・ロックの「感覚の哲学」と「反省の哲学」のいずれの継承を見出すかという点に帰着する。以下でプレヴォの「近代哲学三学派」から、カント評の箇所を引用する。

> カント氏は感覚（sensibilité）と知性（intelligence）を区別した後、時間と空間の思念が、魂の感覚的機能の自然的形式（formes naturelle）と同じようなものであること、これらの思念が外部から生じえないこと、それらが根源的な性質であること、そして、人間精神のこのような構造の結果として、そこに生み出されるすべての印象が必然的にこれらの形式の双方に宿るようになることを指摘した。そして、そのことは彼の原理の重要な部分を占めている。しかし、ロックは我々をつかの間空間に限定しつつ（en nous bornant un instant à l'espace）、延長が一次性質であることを、つまり、延長［外部の実体］が外部にあり、感覚（sensation）から独立していると魂が必然的に判断することを、カント氏以前に指摘した。[8] この同じ哲学者［ロック］と彼の後継

者たち、とりわけコンディヤックは、我々の精神に固有の構成に関わる場合にのみ、我々が外的な事物を知るという点、我々が実体の絶対的で本質的な性質を知らないという点を大いに強調した。我々の魂が延長を［魂の］外部につねに存在するものと見なし、またこの思念がその［我々の魂の］構成にもっぱら関わるものであるなら、延長は恒常的な形式であり、その本性に依存する。この点までは、二つの哲学［カント哲学とロック哲学］は表現の面で異なっているにすぎないと思われる。カント哲学に固有であるのは、彼がすべての現象を空間のある点に不可避的に関係づけるものとして魂を提示しているという指摘だけである。［これは］気づかれていない指摘というよりもむしろ無視された指摘である。おそらく、思念と判断の区分または知性の形式を扱うカント哲学の教義のこの部分に、より新たな主張が存在するのだろうが、［それは］より議論の余地のある主張でもある。[9]

このように、プレヴォは、魂が先験的に時間と空間の「形式」を有しているというカントの主張と、ロックやエティエンヌ・ボノ・ドゥ・コンディヤック（Etienne Bonnot de Condillac, 一七一五―一七八〇）の（魂の外部にある）「形式としての」延長概念との類似を指摘し、カント哲学の新奇性に疑問を呈する。

また、ステュアートは『近代西欧哲学史』第二部第七章で「カントと新しいドイツ学派の他の形而上学者」について論じている。同章でプレヴォの「近代哲学三学派」に言及し、次のように述べている。「プレヴォ氏によるスミス氏の遺稿集の仏訳に付された哲学の現状についての学問的で明快な素描における、カントに対する非常に価値あるいくつかの批評を参照せよ」[10]。そして、ステュアートはスタール夫人（Madame de Staël, 一七六六―一八一七）の『ドイツ論』（一八一〇年）からカントを礼賛する以下の文章を引用している。

『純粋理性批判』が出版されたころ、思想家たちの間には、人間の悟性（human understanding）について二つの体系しか存在しなかった。思想のすべてを感覚（sensations）に帰したロックのそれと、デカルトおよびライプニッツの、魂の霊性と活動、自由意志、要するにあらゆる観念論的考え方の証明に専心するものとであった。［中略］このような広範な不安定の中に、内観がさまよっていたとき、カントが現れ、感覚と魂、外的世界と知的世界という二つの帝国に、限界の線を引こうと試みた。この時の彼の瞑想の力と知恵は、先例のないものである。[11]

ロック哲学を「感覚の哲学」のみに帰するスタール夫人の説明に対し、ステュアートは非常に不正確だと批判する。さらに、このような誤りはゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 一六四六―一七一六）をはじめ近代のドイツ哲学者の見解に従ったものであるとして、ステュアートはフリードリヒ・シュレーゲルの『文学史講義』（一八一八

年版）の文章を引用し、ロック哲学がコンディヤックの哲学と混同されていると指摘する。ステュアートによれば、ロック哲学は「感覚の哲学」と呼びうるのと同じくらい「反省の哲学」と呼びうるものである。スタール夫人らのようなカント哲学の新奇性を強調する見解に対し、ステュアートはプレヴォと同様に否定的である。ステュアートがカントの先駆者として挙げているのは、ケンブリッジ・プラトニストのレイフ・カドワース（Ralph Cudworth, 一六一八―一六八八）である。カドワースは感覚と悟性の相違に関する以下のプラトン主義的教義の例証に努めている。

一．精神の若干の観念は、外的な可感的対象から生じるのではなく、精神そのものの内的活動から生じる。

二．感覚によって受動的に知覚される単純な物資的事物でさえ、精神の活動的力能のみによって知られ理解される。

三．感覚内容（アイステーマタ）と表象（パンタスマタ）の他に、思考内容（ノエーマタ）または知的な観念――その源泉は悟性にのみ遡りうる――が存在する。[12]

ステュアートはカドワースが「感覚と悟性の領域を区別している点で、少なくともカントと同程度にまで進んでいるように思われる」と述べている。また、カドワース以外にも、感覚と悟性のプラトン主義的区別を提示した人物の例として、ケンブリッジ・プラトニストのジョン・スミス（John Smith, 一六一八―一六五二）とヘンリ・モア、モアの影響を受けたジョウジフ・グランヴィル（Joseph Glanvil, 一六三六―一六八〇）、プラトンとカドワースの熱烈な信奉者であるリチャード・プライス（Richard Price, 一七二三―一七九一）の名前を列挙している。したがって、ステュアートに従えば、カント哲学の独自性を主張することは、イングランドの文献に通じた人々にとって説得力を持ちえないのである。

カント自身は『プロレゴーメナ』において、「アプリオリに、かつ諸概念から、［原因と結果の］このような結合を思惟することは、理性にとって全面的に不可能である」とするヒュームの因果理論を検討することにより、「独断論の微睡から眼覚め」、純粋理性の範囲を規定するに至ったとして、次のように述べている。

［私は］原因と結果との連結の概念は、それによって悟性（understanding）がアプリオリに諸物の連結を思惟する唯一の概念では到底なく、むしろ形而上学はまったくもってそうした概念から成り立つということを、見いだした。私はそうした連結の数を確かめようと努め、そして、このことが私の望みどおりに、つまりただ一個の原理から成就したので、私は次にこれらの概念の演繹に取りかかったが、今や私は、これらの概念が、ヒュームの憂慮したように、経験から導き出されたものではなく、純粋悟性から生じたものであることを、確認したのである。[13]

このように自らの理論の独自性を主張するカントに対し、ステュアートは「そこに［新しい］何かを発見することは困難である」と冷淡である。[14] というのは、『プロレゴーメナ』刊行以前から、プライスやリード等ブリテンの様々な著述家が、悟性そのものが新しい観念の源泉であり、この源泉から我々の原因と結果の概念が生じると、ヒュームに返答していたからであり、またカドワースも同様に、『永遠不変の道徳について』（一七三一年）の中で「観念が精神そのものの活動的力能と生得的な豊かさから生じるに違いない」[15] と述べていたからである。

前述のように、プレヴォはカントの空間概念（魂の可感的機能としてアプリオリに備わった「形式」）とロックおよびコンディヤックの延長概念との類似を指摘しているが、ステュアートはこの点についてもカントとカドワースの類似を強調し、主観的真理と客観的真理の区別についてのカドワースの以下の記述を引用している。

> 外部感覚とは異なる別の知覚力能または機能がなければ、我々のすべての知覚は相対的で見せかけで空想的なものにすぎず、いかなる事物の絶対的で確実な真理には到達しないだろう。プロタゴラスが述べているように、誰もが「自らの私的で相対的な考えを真理とみなす」しかなく、我々のすべての思考は見せかけのものにしかすぎないので、いずれも同様に真実の幻となるであろう。
>
> しかし、我々はその後、外部感覚に勝り、それとは異なる性質を有する別の知覚力能が魂に存在することも論証した。それは知る力能または理解する力能、つまり精神そのものに由来する活動的な働きであり、したがって、それが突発性のものでも、たんに私的で相対的で見せかけの空想的な事物でもなく、絶対的に存在するものとそうではないものの理解であるという点で、感覚よりもはるかに高貴な地位を占めているのである。[16]

つまり、カドワースの外部感覚と悟性の区別と、カントの可感的機能と悟性の区別に、ステュアートは類似を見いだすのである。

レヴィ＝モルテラによれば、ステュアートの『近代西欧哲学史』の主要な目的は、スコットランド常識哲学の理論的業績を擁護する観点から、生得説を支持する「デカルト主義者」（デカルトとライプニッツを代表者とする）と、唯物論の枠組みを支持した「ガッサンディ主義者」（ガッサンディ、ホッブズ、フランスの「フィロゾフ」を含む）の論争に立ち返ってそれを再検討することにあった。[17] ステュアートが『近代西欧哲学史』でカント哲学の独自性を否定した理由として、レヴィ＝モルテラは「ステュアートがカントの貢献の独創性にまったく納得できなかった」点とともに、ステュアートが「カントがスコットランド『学派』の哲学（Scottish 'school' of philosophy）の功績を汚しうる厄介な歴史的人物になるかもしれない」と考えた点を挙げている。[18] また、レヴィ＝モルテラによれば、ステュアートはロックの「反省の機能」における「自主的で自発的な活動」を再評価し、ロック以上に「新しい単純観念の基礎的源泉」と

しての「反省の機能」を強調することで、ロックをデカルト主義者に分類した。これによって、「常識哲学の観点からのブリテンの哲学的伝統の継続性と一貫性は保証された」と、レヴィ＝モルテラは主張している。[19]

三、ジョン・ロックにおける「感覚」と「反省」

一七世紀ヨーロッパの哲学の二大潮流は、デカルト、スピノザ、ライプニッツに代表される大陸合理論の系譜と、イギリス経験論の系譜である。ジョン・ロック（John Locke, 一六三二―一七〇四）は近代イギリス経験論の祖と位置づけられている。ロックの主著『人間知性論』は名誉革命直後の一六九〇年にロンドンで出版された。ロックの著作は『人間知性論』以外に、アメリカの独立革命に思想的影響を与えた『統治二論』（一六九〇年）をはじめ、『寛容についての書簡』（ラテン語版一六八九年）、『利子・貨幣論』（一六九二年）、『教育に関する諸考察』（一六九三年）、『キリスト教の合理性』（一六九五年）など多岐の分野にわたる。

『人間知性論』は次の四巻（four books）から構成されている。

第一巻　生得思念（Innate Notions）について
第二部　観念（Ideas）について
第三巻　ことば（Words）について
第四巻　真知（Knowledge）と憶見（Opinion）について

ロックは『人間知性論』第一巻で生得説すなわち「人々は生まれつきの観念をもち、そもそも生まれる初めに精神へ捺印された本源的刻印をもつ」という「広く認められた学説」[20]を論駁した。生得観念論者として有名なのはデカルトであるが、ロックが『人間知性論』第一巻で生得説として名指ししているのは、理神論の祖として知られるエドワード・ハーバート（Edward Herbert, 1st Baron Herbert of Cherbury, 一五八三―一六四八）の『真理について』（一六二四年）である。[21]

ロックは『人間知性論』第二巻で、観念が「どこから、どんな仕方・段階で精神（Mind）の中に来るのか」を検討する。[22]結論から言うと、それは「経験（Experience）と観察（Observation）」によってである。ロックによると、精神は「文字をまったく欠いた白紙」のようなものであり、経験によって観念を備えるようになる。したがって、いっさいの知識の究極的源泉は経験である。つまり、「外的可感的事物（*external, sensible Objections*）」および「私たちがみずから知覚し反省する精神の内的作用（*internal Operations of our Minds, perceived and reflected on by ourselves*）」に対する観察が、知性（Understandings）にすべての思考の材料を提供する。これらが知識の二つの源泉である。[23]

前者（外的可感的事物）については、次のように述べられている。感官（Sense）すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった感覚器官は、個々の可感的対象が感官を感発する（affect）さまざまな仕方に応じて、事物のいろいろ別個な知覚を精神に伝える。こうして、人間は色、味、寒冷、固さなどの可感的性質についての観念を得るのである。したがって、観念の源泉は大

半が感官に依存する。この源泉をロックは「感覚（Sensation）」と呼ぶ[24]。ロックは感官(Sense)と感覚(Sensation)を区別する。『人間知性論』の邦訳者大槻春彦は「感覚」について「当代の生理学的心理学の知見にもとづいて外的対象が感官に印銘される過程ないし様式」と注記する[25]。

後者（精神の内的作用）については、次のように述べられている。「知性がすでにえてある観念について働くとき私たちのうちの私たち自身の精神のいろいろな作用についての知覚」が、観念のもう一つの源泉となる。「精神のいろいろな作用」の具体的な例としてロックが挙げているのは、知覚、考えること、疑うこと、信ずること、知ること、である。人間はこれらの作用を「自分自身のうちに意識し観察する」ことにより、「感官を感発する物体から受け取ると同じ判明な観念」を知性へ受け取ることが可能である。このような源泉について、「内部感官覚（internal Sense）」と呼ばれることもあるが、ロックは「反省(Reflection)」と呼ぶ[26]。

ロックによれば、誕生したばかりの子どもは観念も持たず、成長するにつれて徐々に観念を備えるようになる。そして、大部分の子どもが精神の作用の観念をえるのは、かなり遅くなってからである。ただし、子どもが母親の胎内にいる間に、その子どもの感官を感発する対象について感官を働かせることにより、生まれる前に少々の観念を備えるケースがありうることを、ロックは認めているが、そうした観念は生得観念ではないと主張する。ロックにとって「観念をもつことと知覚(Perception）は同じことである」[27]。ロックは、知覚について考察すべき点として、「感覚で受け取る観念は、成人ではしばしば判断（Judgment）によって変更されながら、私たちはこれに気づかない」ことを挙げている。いずれにせよ、知覚が「知識(*Knowledge*）の第一歩・第一段階で、知識の全材料の入口」となる[28]。

こうして得られた知覚を「知識」へと進歩させる次の段階の「精神機能（Faculty of the Mind）」として、ロックは「把持(*Retention*)」すなわち「精神が感覚あるいは反省から受けとってある観念を維持すること」を挙げている。把持のやり方には二通りの方法がある。それは「観想（*Contemplation*）」と「記憶(*Memory*)」である。前者は「「感覚あるいは反省から」精神へもたらされる観念をしばらく現実に眺め続ける」方法であり、後者は「印銘したのち消えてしまった観念、いいかえると、いわば見えなくなってしまった観念を精神にまた再生する力能」である。したがって、記憶は「観念の貯蔵庫」である[29]。

四、結び――「反省」と理性

プレヴォやステュアートらがロック哲学における「感覚の哲学」と「反省の哲学」のどちらの側面を強調するのかという問題は、前節で見たように、ロックが観念の源泉を感覚と（内部感覚としての)反省の双方に求めたことと関係する。ステュアートはロック哲学における「反省の機能」を重視し、ロックを「デカルト主義」に分類した。ルネ・デカルト（René Descartes, 一五九六―一六五〇）は合理論の代表的な哲学者であり、『方

法序説』（一六三七年）の冒頭で「良識（bon sens）はこの世でもっとも公平に分け与えられているものである」[30]と述べている。この場合の良識は「正しく判断し、真と偽を区別する能力」を指し、理性（raison）と同義である。『方法序説』の目的について、デカルトは次のように宣言する。

> このようにわたしの目的は、自分の理性（raison）を正しく導くために従うべき万人向けの方法をここで教えることではなく、どのように自分の理性を導こうと努力したかを見せるだけなのである。[31]

一方、理性について、ロックは『人間知性論』において信仰との関連で次のように述べている。「ここで信仰（*Faith*）と対照的に区別されたものとしての理性（*Reason*）を私は、精神がその自然の機能を使って、いいかえれば、感覚あるいは反省で、えておいた観念から行う演繹によって到着するような、そうした命題ないし真理の絶対的確実性あるいは蓋然性の発見であるとする」[32]。したがって、ステュアートが解釈するように、ロックが『人間知性論』において「反省の機能」と理性を同一視していたといえるかどうかは検討の余地があると思われる。

冒頭で述べた「スミスにおける哲学への関心」との関係でいえば、彼の「外部感覚論」における「外部世界の認識」の問題、および『道徳感情論』における（当時の哲学者たちの用語でいえば）「精神機能（faculty of the mind）と精神作用（operation of the mind）」の分析等が今後の課題になりうるように思われる。

注

(1) Smith [1776] 1981, p. 687. 訳、（三）、三三九ページ。
(2) Smith [1785] 1987, p. 288. 訳、二七七―二七八ページ。
(3) 水田一九九三、三五〇ページ。
(4) Ross 1995, pp. 97–98. 訳、一〇九―一一〇ページ。
(5) Ross 1995, p. 411. 訳、四六七ページ。
(6) 本節は門二〇一九、一七九―一九九ページに基づいている。
(7) プレヴォの略歴およびプレヴォとステュアートとの交流については、Etchegaray et al. 2012を参照。
(8) 原文では、ここに以下の注記が付されている。「『人間知性論』第二巻第八章第九節．スミスの『外部感覚について』も参照」。
(9) Prévost 1797, pp. 263–265.
(10) Stewart 1854–1860, I, p. 415, note 1.
(11) Stewart 1854–1860, I, pp. 395–397. Staël [1810] 1958–1960, IV, pp. 113–114, 116–119. 訳、（三）、七〇―七一ページ。
(12) Stewart 1854–1860, I, p. 399.
(13) Kant [1783] 2004, p. 10. 訳、一九四ページ。
(14) Stewart 1854–1860, I, p. 405.
(15) Stewart 1854–1860, I, p. 406. Cudworth [1731] 1996, p. 83.
(16) Stewart 1854–1860, I, pp. 406–407. Cudworth [1731] 1996, p. 134.
(17) Levi Mortera 2012, p. 139.
(18) Levi Mortera 2012, p. 141.
(19) Levi Mortera 2012, p. 141.
(20) EHU, p. 104. 訳、（一）、一三三ページ。
(21) EHU, p. 77. 訳、（一）、八九ページ。
(22) “Mind”という語は大槻訳では「心」と訳されているが、本稿では「精神」で統一する。*Oxford English Dictionary*

には“Mind”の語義として「一：記憶の機能」、「二：思考、目的、意図」「三：精神的または心的存在または機能（Mental or psychic being or faculty）」などが挙げられている。これらの語義のうち、「三：精神的または心的存在または機能」の用例として、『人間知性論』初版（一六九〇年）の第一巻第二章第五節の一文「未だかつて意識しなかった命題［中略］が精神（Mind）にあると言うことはできない」（EDU, p. 50. 訳、（一）、四四ページ）が引用されている。

(23) 以上、EHU, p. 104. 訳、（一）、一三三―一三四ページ。
(24) 以上、EHU, p. 105. 訳、（一）、一三四ページ。
(25) 大槻訳、（一）、一四五ページ。
(26) 以上、EHU, p. 105. 訳、（一）、一三五ページ。“Reflection”という語は大槻訳では「内省」と訳されているが、本稿では「反省」で統一する。
(27) 以上、EHU, pp. 106, 108. 訳、（一）、一三七、一三九ページ。
(28) 以上、EHU, p. 145, 149. 訳、（一）、二〇四、二一〇ページ。
(29) 以上、EHU, pp. 149–150. 訳、（一）、二一二ページ。
(30) Descartes［1637］1869, p. 2. 訳、八ページ。
(31) Descartes［1637］1869, pp. 4–5. 訳、一一ページ。
(32) EHU, p. 689. 訳、（四）、三〇一ページ。“Reason”という語は大槻訳では「理知」と訳されているが、本稿は「理性」で統一する。

参考文献

略号

EHU: John Locke［1690, 1975］2012. *An essay concerning human understanding*, edited with an introduction, critical apparatus and glossary by Peter H. Nidditch. Oxford: Clarendon Press. 大槻春彦訳『人間知性論』（全四冊）岩波文庫、二〇〇四年（初版一九七四年）。

一　次文献

Cudworth, Ralph［1731］1996. *A treatise concerning eternal and immutable morality: with A treatise of freewill*, edited by Sarah Hutton. Cambridge: Cambridge University Press.

Descartes, René［1637］1869. *Discours de la méthode pour bien conduire sa raison et chercher la vérité dans les sciences*. Nouvelle édition, publiée avec une introduction et des notes par G. Vapereau. Paris: Libraire de L. Hachette et Cie. 谷川多佳子訳『方法序説』岩波文庫、一九九七年。

Kant, Immanuel［1781］1999. *Critique of pure reason*, translated and edited by Paul Guyer and Allen W. Wood. Cambridge: Cambridge University Press. 有福孝岳訳『純粋理性批判：上・中』（カント全集・第四―五巻）岩波書店、二〇〇一年。有福孝岳訳・久呉高之訳『純粋理性批判：下／プロレゴーメナ』（カント全集・第六巻）岩波書店、二〇〇六年。

――［1783］2004. *Prolegomena to any future metaphysics that will be able to present itself as a science: with selections from the Critique of pure reason*, translated by Gary Hatfield. Revised edition. Cambridge: Cambridge University Press. 久呉高之訳「プロレゴーメナ」有福孝岳訳・久呉高之訳『純粋理性批判：下／プロレゴーメナ』（カント全集・第六巻）所収、岩波書店、二〇〇六年、一八一―三七二ページ。

Prévost, Pierre 1797. “Réflexions sur les Œuvres posthumes d’Adam Smith; par le Traducteur”. Dans Adam Smith,

Essais philosophiques, traduits de l. anglais par P. Prévost. 2 vols. A Paris: chez H. Agasse, II: pp. 229–271.
Smith, Adam [1776] 1981. *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*. General editors, R.H. Campbell and A.S. Skinner, textual editor, W.B. Todd. Indianapolis: Liberty Fund. 水田洋監訳、杉山忠平訳『国富論』全四冊、岩波書店、二〇〇〇—二〇〇一年。
—— [1785] 1987. *The correspondence of Adam Smith*, edited by Ernest Campbell Mossner and Ian Simpson Ross. Indianapolis: Liberty Classics. 篠原久・只腰親和・野原慎司訳『イギリス思想家書簡集　アダム・スミス』名古屋大学出版会、二〇二二年。
Staël, Mme de [1810] 1958–1960. *De l'Allemagne*, une introduction, des notices et des notes par la comtesse Jean de Pange, avec le concours de Simone Balayé. Nouvelle édition. 5 toms. Paris: Hachette. エレーヌ・ド・グロート・梶谷春子・中村加津・大竹仁子訳『ドイツ論』（全三冊）島影社、一九九六年。
Stewart, Dugald 1854–1860. *The collected works of Dugald Stewart*, edited by Sir W William Hamilton. 11 vols. Edinburgh: T. Constable.

二次文献

Etchegaray, Claire, Knud Haakonssen, Daniel Schulthess, David Stauffer and Paul Wood 2012. "The context of the Stewart-Prevost correspondence". *History of European ideas*, 38(1): pp. 5–18.
Levi Mortera, Emanuele 2012. "Stewart, Kant, and the reworking of common sense". *History of European ideas*, 38(1): pp. 122–142.
Ross, Ian Simpson, 1995. *The life of Adam Smith*. Oxford: Clarendon Press. New York, Tokyo: Oxford University Press. 篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』シュプリンガー・フェアラーク東京、二〇〇〇年。
門亜樹子二〇一九．『啓発された自己愛：バルベラックの啓蒙思想と道徳思想』京都大学学術出版会。
水田洋一九九三「解説」アダム・スミス『アダム・スミス哲学論文集』アダム・スミスの会監修、水田洋ほか訳、名古屋大学出版会、三四五—三六二ページ。

CD-ROM

Oxford English Dictionary, second edition, on CD-ROM version 4.0. Oxford: Oxford University Press, 2009.

※本研究は JSPS 科研費 JP20K00097 の助成を受けたものである。